



の子は、これまで件の出雲弁落語を三度高座にかけたが、どの回にもぼくからすれば少々特異と思える反応をいただいている。子ども落語に関わって十数年、お客さんの反応はいくつかに類型化でき、表現は異なっているが、どれかにあてはまるのが常である。

まずは「おもしろかった」というもの。おもしろい話をおもしろいと感じてもらえれば落語の目的は達するのだから、これを言われると素直にうれしい。子どもたちにとっては「やってよかった」という充実感を覚える言葉である。

次いで「上手だったよ」。これは、巧みに演じたね、という意だから、これも子どもたちは報われた気になるうれしい言葉だ。

それから、「よく覚えたね」。通常五分も十分もかかる長い話を記憶して語るなどという機会はないので、確かに子どもたちは賞賛に値することをしていいる。これも子どもたちは喜んで聞いているが、少しひねた見方をする、おもしろかったか否か、上手だったか否か、いずれとも無縁に成立する褒め言葉だ。

ところが、この出雲弁落語に関しては、「また聞きたい」、「次はいつ聞ける?」という反応がとても多い。これは、これまでに経験がない。

このネタを子どもたちがやるのは、初めてではない。以前出雲の学校でやっていたときは複数の子が持ちネタにしていた。もともとおもしろいネタではあるから、先の「おもしろかった」という言葉はよくいただいていた。でも「次はいつだ」と催促までされるようなことはなかった。その子たちに比べて今話している子が突出して上手に演じているというわけではない。ちがいはたった一つ、出雲弁か共通語か、というだけである。方言はここまで人の心を動かすのか、と驚くばかりだ。

こうなったら、せめて当地と縁の深い、できれば家族に協力の得られる子どもには全編出雲弁落語を一つはレパートリーに加えてほしいと思ひ、せつせと翻訳をしていいる。どんな囃も出雲弁にできる、とはいかないのが難しいところで、言葉だけ替えても囃として成立しなくなるのも少なくないし、肝心の出雲のおつつあんもおばさん(ほとんどどぼくの両親や叔父叔母だ)が立ち上がったてこないとうしようもない。江戸落語よりも上方落語の方がまだしも翻訳しやすいというのにも興味深い発見だった。

寄席では、多いときで十人、少なくても四五人が出演するが、中に一つは出雲弁落語が入っている、そんな落語教室を思い描いている。

木幡智恵美

老い老いに

8

昨

年三度目の北海道旅行にいくはずだったのが、行く途中事故に遭い中断する羽目に。北海道には早期退職した年と、その次の年にバイクで行っている。北海道をバイクで旅することに少なからず影響を与えたのが、二年目に編集長が連載した「北海道カブ一人旅」だ。編集長は「これはおすすめ」も続けながら、「北海道カブ一人旅」を書き始めている。その頃、私にとつて北海道は全く縁のないところだったので、出てくる地名も名勝も頭の上を素通りしていた。けれども、今読み返すと、自分が走った時の情景が浮かんでくる。一年目は七月中だったので寒さとの戦いだった。あるもの皆着込み、タオルまで首に巻き付けても寒いのだ。狩勝峠も石北峠も雪景色の上霧で視界が悪く、夫のバイクのテールライトだけを頼りに走った。二年目は時期を一月ほど後にずらしたので、一年目ほど寒くはなかった。そして、ほぼ一周といった感じで回ったので、カブの軌跡と重なるところが結構あった。編集長の旅は一人で四週間近く、行きは下道をひたすら走るし、道中には様々な苦勞あり、出会いありの旅で、私が経験したのとは比べようもない分厚いものだ。けれども、読んでいいるうちに、広大な土地、どこまでもまっすぐに続く道路、すぐそばで草を食む牛や馬、道の真ん中で寝そべっていたキタキツネや木の陰に佇むエゾシカ、オホーツクの夜明けの海、浜に並んだ昆布、見るもの皆新しく、胸が躍ったあの旅を思い出した。

同じく紀行文をOさんが連載してくれている。こちらは夏休みにイギリスを旅した後、はやはやの文章を寄せてくれた。その頃には私も何とかメールのやり取りができるようになっていて、Oさんから受け取った原稿をワードに打ち込みメールで編集長に送った。だから、いち早く原稿を読める。大英博物館やトラファルガー広場、ヨークやスコットランド、リバプールを巡ったツアーの様子、頭に残る写真などの映像を浮かべながら打ち込んだ。買い物や飲食、金銭感覚の違いなど、日常の様子も綴られ興味深かった。当時の首相はメージャー氏。マーガレット・サッチャー首相とブレア首相の間に首相を務めた人だ。

30代フリーター 台湾の憲法裁判所にあたる司法院の憲法廷が先月、死刑制度を合憲とする一方で、実質的に死刑判決を出しにくくする判決を出した。

年金生活者 背景には、吉本隆明のいう「国家を開く」ことを目指す台湾の先進性がある。吉本は「国民の無記名直接投票によって、過半数以上の賛成があれば、いつでも政府をリコールできる——そういう条文を憲法、もしくは、その他の国法に盛り込めば、『国家を国民に対して開く』第一歩になります」と語っている（『私の「戦争論』』）。これを一般化して言えば、国民の意志を第一にすることが「国家を国民に対して開く」ことだということになる。これを拡張して、国民の「意志」だけでなく「存在」を第一にすることにすれば、国民の生命を奪う死刑は廃止されなければならないという結論に行き着く。

30代 台湾はどのようにして国家を開いているんだ。

年金 蔡英文政権でデジタル担当大臣 1969年に死刑を廃止したイギリスでは、廃止前の1965年の世論調査で70%が死刑を支持していた。ドイツでは1949年に死刑が廃止されたが、前年の世論調査では、現状の死刑存続に賛成37%、凶悪犯罪に限り死刑存続に賛成37%、死刑反対21%だった。1981年に死刑を廃止したフランスも、その年の世論調査では死刑存続支持62%に対し、死刑廃止支持は33%だった。

年金 それでも、英独仏3国とも死刑は復活していない。存続派も強くそれを求めず、事実上あきらめていると推定される。死刑制度の有無は、景気の悪化や戦争などと違って、大多数の人の生活に直結しないからだ。

凶悪犯の逮捕のニュースを見て、あんなやつ死刑だ！と思う人は多い。それはとっさに被害者を自分や家族や友人に置き換えて考えるからだ。しか

としてコロナ対策などにあたったオードリー・タン（唐鳳）は、閣僚就任の要請を受けたとき3つの条件を出したことを自著（『オードリー・タン デジタルとAIの未来を語る』）で打ち明けている。①行政院（日本の内閣に相当）に限らず、他の場所でも仕事をすることを認める②出席するすべての会議・イベント・メディア・納税者とのやりとりは、録音や録画をして公開する③誰かに命じること命じられることもなく、フラットな立場からアドバイスを行う。政権はすぐにそれら全部を受け入れたという。

行政の常識をくつがえすようなこの3条件の提示は国家が閉じられることを阻もうとする意志の表明と受け取ることができる。

30代 世界では死刑制度がない国と、あっても死刑を執行しない国が合わせて7割に達している。

年金 ミシェル・フーコーが「生権力」と名づけた近代の権力の原理に死刑制度が反していることが背景にある。

し、実際に被害に遭ったわけではないし、将来も遭う確率は低い。死刑制度がないと困る、と政府や議会に訴える行動を起こすところまではいかないし、選挙の投票のさいにはたいいそれは忘れている。

30代 日本では、内閣府の世論調査（2

近代以前の権力が、逆らう者を殺すことによって人びとを支配したのに対し、近代の権力は逆に人びとを生かし、それを管理することによって支配する、とフーコーは考え、それを「生権力」と呼んだ。

それはふた通りのあらわれ方をする。ひとつは人びとの身体を規律どおりに動くようにする調教で、軍隊や工場、学校などで行われている。もう一方でこの権力は統計などをもとに、住民全体の健康や人口を管理するというやり方で発現する。どちらも死を排除しようとする点で共通している。

殺す権力から生かす権力への転換は、資本主義の発達が富の稀少性を大幅に縮減し、人びとを養える余裕が拡大したことによる。殺して労働力を失うよりも、生かして労働力を増やすほうが、資本主義にとっては都合がいい。労働力は過剰なほうが買い叩けるからだ。欧州などでの死刑廃止が世論の要求からではなく、政府主導で行われた背景にそれがある。

019年）だと、「死刑もやむを得ない」が80・8%にもなっている。

年金 宗教と法が西欧のように分離し切っていないため、神だけが持つはずの人命を奪う権限を国家も持つと無意識のうちに考えられていることが背景にあると推定される。それは「現人神」が「象徴」と名をかえて憲法の中に位置づけられていることであらわれている。神意が法を左右し、それによって、国家による殺人が神の名によって正当化される。それが無意識のうちに繰り返されている。

世界で死刑制度を残している国は全体の約3割だが、その中には宗教と法が分離していないイスラム圏の国が目立つ。エジプト、イラン、イラク、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、ヨルダン、アフガニスタン、インドネシア、パキスタンなどだ。アメリカに死刑制度が残っているのも、「宗教国家」を理想としたピューリタンによって建国されたことが背景にあると考えることができる。

ニュース日記 941
中村 礼治

死刑を廃止することは 国家を開くことだ